



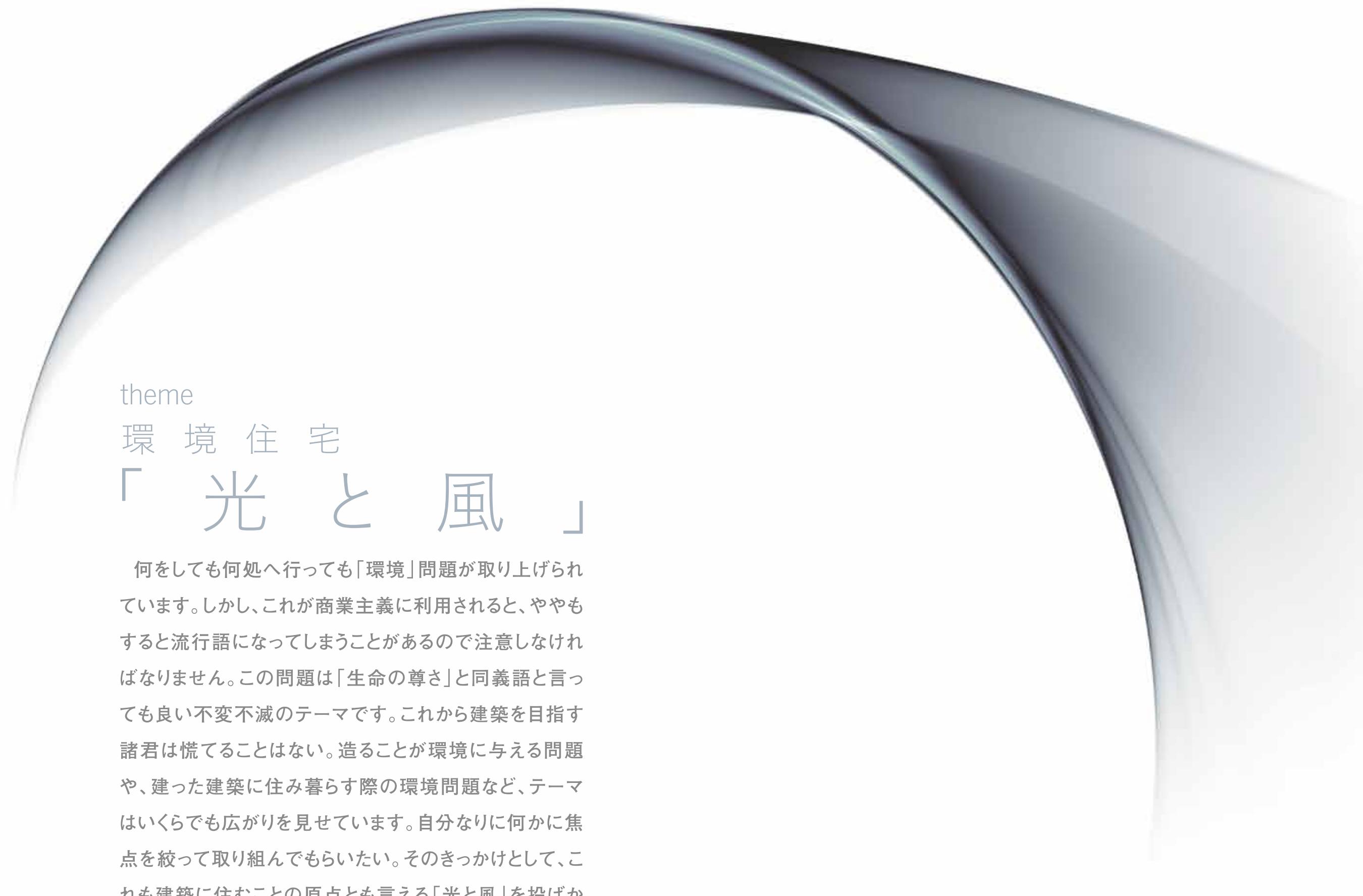
Japan Architectural Consortium of Students

全日本学生建築コンソーシアム

後援:朝日新聞社

2011 residential design
competition
[住宅設計コンペ]

応募要項



theme

環 境 住 宅

「光と風」

何をしても何処へ行っても「環境」問題が取り上げられています。しかし、これが商業主義に利用されると、ややもすると流行語になってしまうことがあるので注意しなければなりません。この問題は「生命の尊さ」と同義語としても良い不变不滅のテーマです。これから建築を目指す諸君は慌てることはない。造ることが環境に与える問題や、建った建築に住み暮らす際の環境問題など、テーマはいくらでも広がりを見せていています。自分なりに何かに焦点を絞って取り組んでもらいたい。そのきっかけとして、これも建築に住むことの原点とも言える「光と風」を投げかけたいと思います。考えてみて下さい。

design condition

建物の配置から仕様まで、 総合的に提案してください。

テーマの解釈は自由です。設計主旨でご説明下さい。

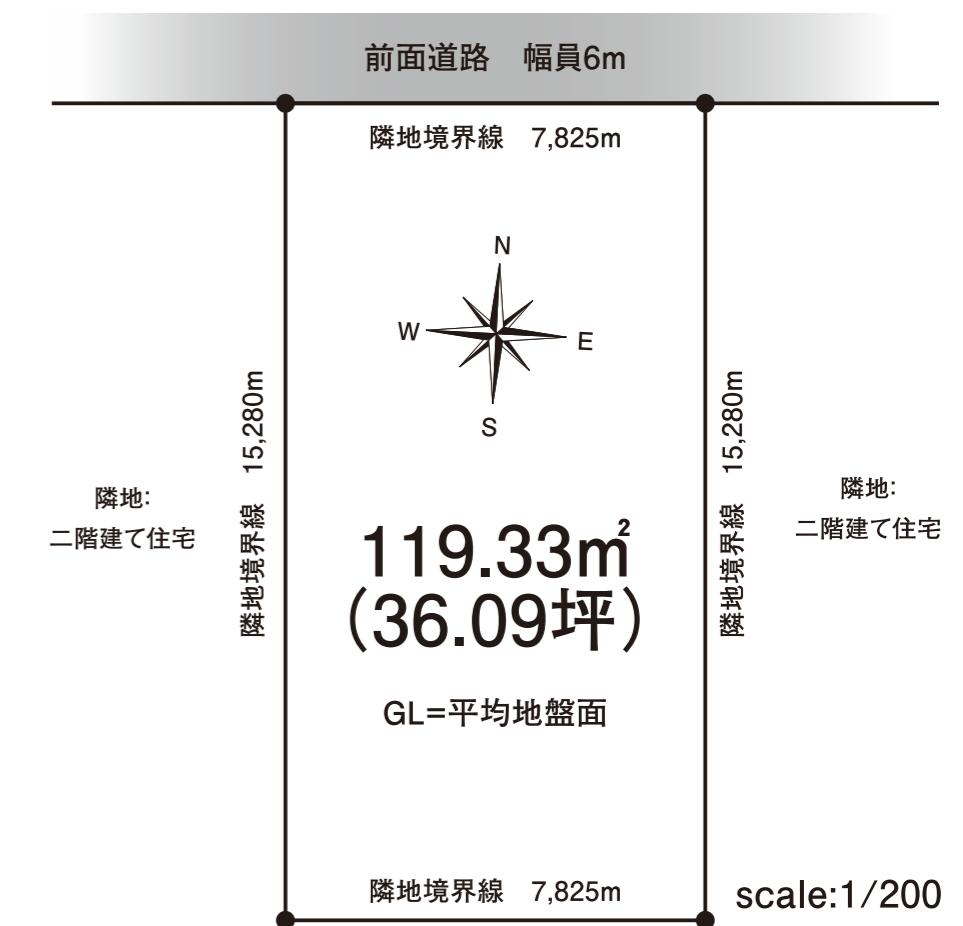
テーマをふまえ、建築・販売を前提とした住宅であること。敷地に対する景観を最大限に考慮したデザインで間取りは、家族条件を考慮し、近隣住民とのコミュニケーション等、公共的な視点にも配慮すること。将来的にデザイン住宅増大に寄与することをめざしたもので、記載項目を満たすこと。

テーマ 環境住宅「光と風」

敷地概要

甲信越地方のある地域を想定(特に考慮すべき気象条件は定めません)

- 用途地域／第一種中高層住居専用地域
- 容積率／150% ■建蔽率／60%
- 敷地面積／119.33m²(36.09坪) ■地盤の高低差／なし
- 地区計画／壁面後退 隣地側1m以上(仕上り面)
道路側1.5m以上(仕上り面)



家族条件

- お父さん 38歳
- お母さん 36歳
- 長男 7歳
- 長女 5歳
- 小型犬 一匹

建物条件

- 構造 木造在来工法
- 建築基準法上、建築可能なこと。
(建築に関わる各種法令などを遵守)
- 外構 駐車場2台分を確保

※記載項目より細部にわたる条件については、常識の範囲内で各自想定のこと

応募資格 ○平成23年4月1日現在在学中の学生(大学・専門学校・短大・大学院他)

1次審査提出内容

- 設計主旨(800文字程度にまとめる)※1枚目に記入
- パース(カラープリントまたはカラープリンター出力)データ入稿は不可。
- 設計図面(縮尺は1/100)
 - 各階平面図(西を上部に配置)
 - 立面図(4面以上) ●配置図(屋根伏せ図を兼ねる)

※質疑については4月末までメールにて受付し、主催者および審査員が特に必要と認める質疑に対しては順次メールやHP上にて回答致します。

これら全てA3横位置(297×420mm)4枚以内に納め、綴じずに、下記2カ所に提出。

- 1.書類は「JACS新潟事務局」まで提出。
- 2.データ化(pdf書類、もしくはjpeg:200dpi以上)し、フォルダにまとめ、圧縮し下記に送信。

1.書類送付先 JACS新潟事務局
〒950-0148 新潟市江南区東早通1-1-40(株式会社ステーツ内)「2011設計コンペ係」宛
Tel.025-383-3003 Fax.025-383-3733

2.データ送信先 kazama@states.co.jp

※表現方法は、鉛筆、インキング、着色、写真貼付、プリントアウトなどいずれも自由。但しパネル化しないこと。
※送付に当たって書類を丸めず平面で提出すること。

2次審査提出内容

○模型

縮尺:1/50、サイズ:W60cm×D60cm×H45cm以内(ベースを含む)、
重量:3kg以内(ベースを含む)

JACS東京事務局まで提出。※ケースに入れて展示する為、規定サイズを厳守して下さい。

模型送付先 JACS東京事務局
〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3(JAM内)「2011設計コンペ係」宛

※提出模型はご希望される方には返却を行います。

応募にあたっての注意事項

- 応募は1人に付き1点(グループでの応募も可能)
- 応募作品は未発表の作品であり、他のコンペに提出していないものに限ります。
- 設計主旨・図面は、規定のサイズに印刷出力して応募してください。
- デジタルデータの応募は認めませんが、応募作品は、Web上にて全て公開いたしますので
デジタルデータを預めご用意下さい。(jpeg・bmp形式のみ)
- 提出する設計主旨、設計図面、模型には裏面に氏名を記入して下さい。

grand prix

最優秀賞「からまりの家」

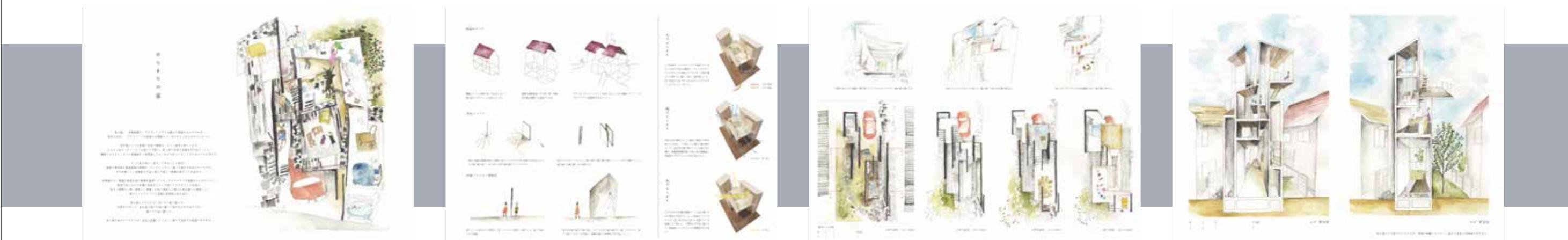
横浜国立大学大学院
工学府社会空間システム学
建築学科 大学院

伊藤孝仁・富永美保



Concept

光と風。自然現象は、グラデーションで絶えず変化するものである。現代の住宅とプライバシーを重視する間取りは、全てを1と0に分けてしまった。光や風といった現象と住宅の関係を、もう一度考え方直してみる。1と0に分けられてしまった様々な空間に、光と風の多様な状態を生み出すことで機能によらないもっと恨め的な「居場所」のようなものをつくることはできないかと考えた。そこで光やカゼが「流れ」であることに着目し、建築の根本的な構成要素の関係を「ずらす」ことで、様々な流れを住宅にからませる。それを通して、家族向上や家と街との新しい関係を探ることを試みた。具体的には、敷地の南北方向に壁柱を配置していく、そこにスラブや屋根をからませていく。敷地の中に大きな状態の変化をもたらす壁もからまるような生活は、明るい場所から暗い場所へ、風通しの良い場所から静かな風を感じる場所へと、豊かなシーケンスと多様な居場所を生み出す。壁を隔てたとなりは、近いのに遠く感じる。夕食のにおいが、家を通り抜ける風に乗って街の中中にはみ出すとき、遠いのに近く感じる。光と風が家にからまるとき、単純な距離によらない、絶えず変化する関係が生まれる。



優秀賞「地下鉄の出口」

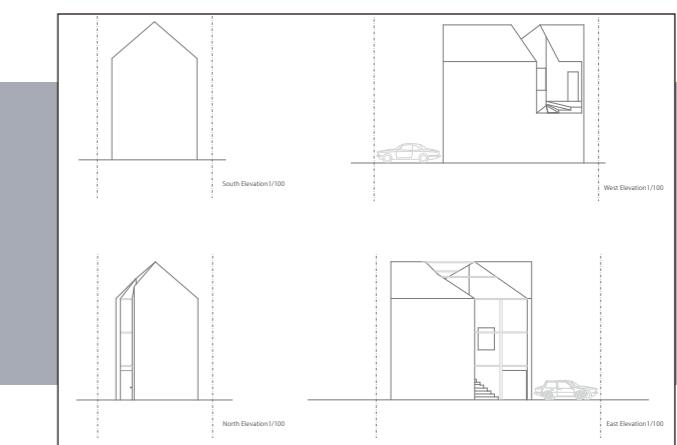
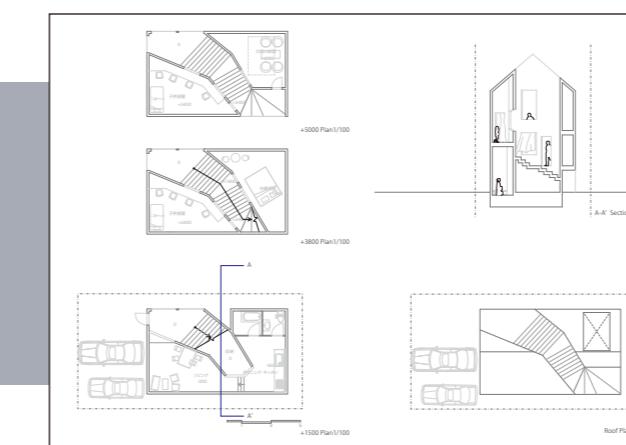
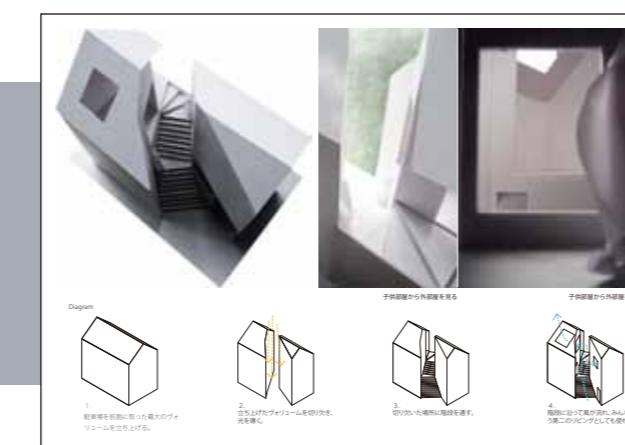
向山 直也・行木 慎一郎

法政大学大学院
デザイン工学研究科 建築学専攻 大学院



Concept

私たちがリアリティを持つ「風と光に満ちた空間」は地下鉄の出口であった。薄暗い階段を昇る時、風に背中を押され、目線の先には光が降り注ぐ出口とその向こうの空。その時の電車の中では感じていない風の温度、匂い、空の高さ、明るさから、季節の移り変わりや時間を感じる。そのイメージを建築化するとき、大階段を中心とした建築を考えた。プリミティブな家型のヴォリュームによって周辺の住居と適合し、そのヴォリュームをシンプルに切り欠いた場所に大階段を通す。大階段は途中で2度クランクし、決して広くはない敷地内の空間体験を豊かなものとする。大階段は玄関と外部屋を結び、風、光を階下に導く。そして全ての居室は階段に寄り添うように配置される。リビングという決められた居室でのみ家族が集うのではなく、偶然町の中で友人と出くわすように、階段で家族と集う。そんな階段を幹、居室を枝葉とした、樹木のようなすまい。



優秀賞「ちかい家」

東京理科大学大学院
理工学研究科 大学院

古川 正敏



Concept

外を歩くときの、ありのままの光の美しさやあたたかさ、風の吹きぬける匂いを感じることができるように家を創りたいと考えました。

この家は外部空間のような内部空間です。屋根も壁もなく、外にいるような清々しい気持ちになれる家です。

「ちかい家」は外との距離のちかい家。そして家族との距離のちかい家になります。

家族が生活するための最小限の機能を地下に創ります。それぞれの機能を、光の入る時間と調整しながら配置していきます。

例えば寝室なら朝日がたくさん入ってくる場所に配置します。そして機能ごとに違う性格をもった光をトップライトから落とします。

トップライトからの光は、光のもつ美しさをあらためて感じることができます。室内では時に明るく、時に暗く、毎日の天気によって光量が変化し、それぞれの空間も毎日顔を変えていきます。

常に生活の中に光があり、光のもとに家族が集いあうような空間となります。

そしてグランドレベルの空間は、住宅街の中で風の抜ける通り道となります。子どもたちが遊んだり、お父さんが日曜大工をしたり、家族で、バーベキューをしたりできるような、大きな箱につつまれた原っぱのような空間が広がっています。風とともに家族が過ごせるような空間です。

これから、より重要度の増すと思われる住宅の安全性。地下空間をメインに据えたこの家は、地震や火災があった場合でも強く、倒壊などの心配もほとんどありません。さらに、周辺の建物より背の低いため、周辺の住宅に対しても快適な環境を提供します。

「ちかい家」は小さな原っぱのような場所となり街の新たな風景となります。



協賛者賞「”浮き壁”の家」

神戸大学大学院 工学研究科
建築学専攻 大学院

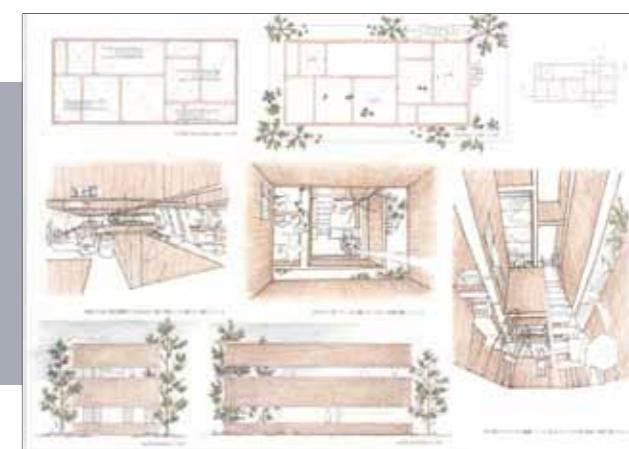
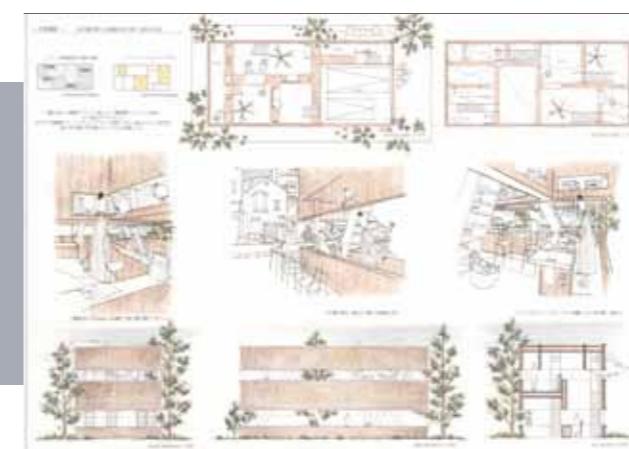
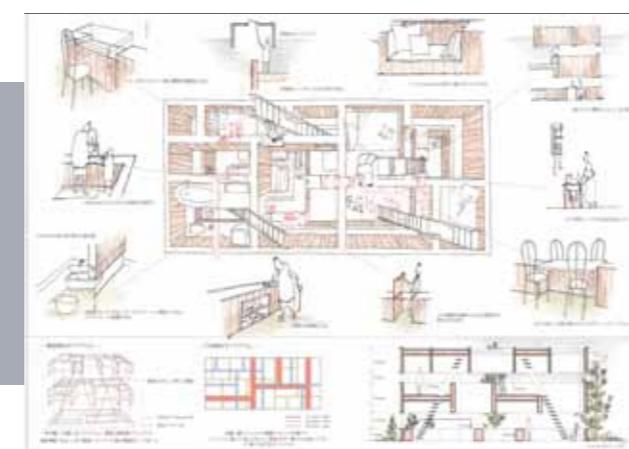
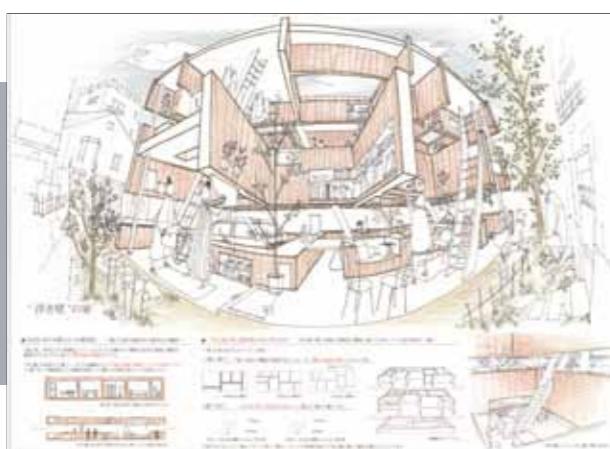
一瀬 健人・野口 理沙子



Concept

- 住宅における閉じきった関係性ー
閉じた室・分断された都市との関係ー
「室と室」、「住宅とその他周辺」、といったこれらの分断された関係は
住宅や家族の関係を、窮屈にさせる。

さらに言うと、都市全体を窮屈にさせる。
- 「光と風」を共有する“帯”というものを提案する。
この帯を家族や周辺の人々で共有することで、
閉じきった関係性からの脱却を試み、より豊かな生活を送ることを目的とする。



協賛者賞「かべにわのいえ」

横浜国立大学大学院
建築都市スクール/Y-GSA 大学院

佐藤 大基



Concept

人の生活の中に自然が混ざっていくような家を提案します。人々は昔から自然を感じながら生活をしてきました。自然の中に住み着くように家を建てて生活し、隣人との境界も木が作っていたり、植物が周囲の視界を遮っていたり、自然と関係を上手に作りながら行きました。現在の都市では、身近にあった自然もほとんど見られなくなってしまいました。住宅地の敷地の中では家が大きな場所をとり、残りの場所に庭が作られています。壁によって庭との明確な境界が作られ、庭も自然というよりは作られたものとしてあります。また、庭は生活とは遠い距離にあり、ただそこにあるものとしてだけ木が生えていたり植物が植えられていたりします。庭に自然があることで周辺の人々との交流場所が生まれる風景も、作られた庭では周辺との境界として存在してしまいます。もっと庭が自然になるような、家と庭との、生活と自然との新しい関係が作れないでしょうか。



佳作 (26点・順不同)

※作品のコンセプトは一部抜粋したものです。



「new icon house」

九州大学大学院
間環境学府空間システム専攻 大学院

西亀 和也

切妻屋根の小さなボリューム。イエ型は住宅を表現する際に用いられる最も典型的なアイコンである。そこには内部と外部の境界が明確に表現されている。明確な境界、閉じたボリューム。日々変化する時代の中でも変化することのないアイコン。住むことの原点であり、住宅にとって切り離すことのできない光と風を取り入れるシステムはそこには表現されていない。これらの要素を取り入れつつ、現代社会における家族のライフスタイルに柔軟に対応する住宅とはどのようなものなのか。本提案では住宅のシンボルとして認知されるイエ型を用いて、新たな住宅の典型を構築する。イエ型のアイコンを一度バラバラにし、解体されたボリュームを組み合わせることで住宅を再構成する。バラバラになったボリュームを再び組み合わせる際に、それぞれのボリュームの間に隙間を作る。ボリューム同士は互いに接することはないが、イエ型の輪郭を持った一つのまとまりとして構成される。個々のボリュームの間に外部と接した隙間が生まれることで、光と風が住宅内を駆け巡る。隙間には直射日光や間接光が入り込み、風が住宅の中心を吹き抜け、住宅の内部と外部の境界を曖昧にする。この住宅には玄関が4つあり、一人につづつボリュームが与えられる。「個人」が強く意識され「家族」という単位が変化している時代の中で、この住宅は「個人の集合体としての家族」の住宅となる。ボリュームの隙間に出来た空間は柔らかな光と風をそれぞれの部屋に届けると同時に、家族同士をゆるやかにつなぐ緩衝空間となる。光と風によって生まれた新たな境界は、家族にほどよい距離感を与え、様々な表情を見せる空間となる。この住宅はこれまでのイエ型に表現されていなかった光と風、そして家族の現状を表現する新たな住宅のアイコンとなる。



「環境住宅」という言い方は
なんだかとても自己完結的である。」

慶應義塾大学
理工学部システムデザイン工学科 4年生

星川 慎之介

「環境住宅」という言い方はなんだかとても自己完結的である。住宅地において周囲に関係なく自身のみが良い環境を得ようとするのは住宅内部のみの問題を扱っているようで建ち方が閉じていて自己完結的である。一般的な住宅街では住宅は周囲との関係性が希薄であり、どの家もバラバラに建てられている。共通点といえば、どれも敷地いっぱいに建てられた建築の中に、機能にそった大小さまざまな部屋を並べていくのではない。大小の余白の部屋を配置し、その隙間を縫うようにして居住空間を配置していく。余白の部屋は居住空間と同等以上の大きさを持ち、互い違いに配置される。ルーピックキューブのように分節された居住空間は、天井面を含めた5面が外気に接する構成となる。つまり、從来のように壁の向こう側に人の気配を感じながら生活する状況ではなく、壁の向こう側には光と風に満ちた余白の部屋と向き合いながら生活することになる。

そして、窓は外部には存在しない。外部に対して開くのではなく、余白の部屋を開いている。そのため、隣接する家からも心地よい距離感を保った状況が生まれる。家族の気配は室内からこぼれる光が余白の空間を介してやわらかく伝わってくる。余白の部屋を通じて家族の様子がなんとなく感じ取れる。直接つながるのでなく間接的な意識のつながりがある。時に余白の部屋は間接照明のように光を拡散させ居住空間にあたたかい光を運ぶ。時にそよ風を捕まえて居住空間にさわやかな風を運ぶだろう。朝は太陽の光に満たされた余白の部屋は、夜には生活の光に満たされる。刻々とその表情と役割を変えながら、日常の生活に新しい秩序を生み出しえる。

家をつくるプロセスを変える。
「余白の部屋」がある家を提案する。余白の部屋とはひとが入ることのない光と風に満ちた部屋である。従来のように敷地いっぱいに建てられた建築の中に、機能にそった大小さまざまな部屋を並べていくのではない。大小の余白の部屋を配置し、その隙間を縫うようにして居住空間を配置していく。余白の部屋は居住空間と同等以上の大きさを持ち、互い違いに配置される。ルーピックキューブのように分節された居住空間は、天井面を含めた5面が外気に接する構成となる。静かに佇む風景を切り取るガラスのキャンパスと動く風景が溢れる屋根上の広場があるような家の提案。都市の中では、様々な建物が短期間に多様な変化をしていく街並み、自然が豊かな地域では、波打つ川の流れや風に揺れる緑等を眺望として住む人々に心地の良い風景を生み出している。それに比べて、郊外住宅地の個性の無い街並みは眺望する対象が欠如していると感じる。その風景の欠如を環境問題と捉えることで住まいの原点である光と風とは何かを考えた。敷地には2つの山がある。それは細長い鉛筆のような高い山と平たい饅頭のような低い山である。2つの個性の異なる山は自然の地形のようない境を作り出す。高い山の南面をガラス壁にする。ガラス壁が南面に向くことで最大限の採光を確保する。そのことで、背の高いガラス壁は周囲の風景を映し出す1枚の風景画になり、更に光を反射させることで低い山を明るく照らし出す。低い山の上では、夫婦がひなたぼっこをしたり、子供が遊んだり、犬が走り回るような動く風景が生まれ、街を明るく照らし出す広場になると考える。高い山は敷地北側の道路に影を落す。そのことにより、道路を歩く人や他の住宅等に清涼感を与えることを期待できる。窓からの光の通り道と建物による影は道路の印象を変貌させる。高い山があることで風が生み出され、山から頭上を飛び越えて広場に吹き、山に当たって家と家の隙間に吹き、高い山と低い山の付け根にある風の通り道から道路に向かって細長い風が吹き抜けたりする。たくさんの風の通り道が生まれることで様々な風の音が作り出されて街を彩っていく。住宅の中だけではなく、周囲の環境にも様々な光と風の自然による心地良さを与えることで、住宅の存在が1つの風景へと変わり、眺望を獲得する郊外住宅地は、更に豊かになると考へる。

距離に包まれる家
建築と外からやってくるものがどういう関係であるべきか問うこと、それが光と風を含む全ての周囲を建築でとり扱うことになるのではないかと考えた。

建築と外からやってくるものがどういう関係であるべきか問うこと、それが光と風を含む全ての周囲を建築でとり扱うことになるのではないかと考えた。

建築と外からやってくるものの関係を想像したとき、日本家屋の縁側が思い浮かんだ。日射からも風からも、そして周囲の環境からも、少し距離をとるイメージである。ここで言う「距離をとる」ということは決して対象から離れるものではない。むしろ光や風、その他多くの周囲をひきつけるためにある。

建築と外からやってくるものの関係を想像したとき、日本家屋の縁側が思い浮かんだ。日射からも風からも、そして周囲の環境からも、少し距離をとるイメージである。ここで言う「距離をとる」ということは決して対象から離れるものではない。むしろ光や風、その他多くの周囲をひきつけるためにある。

建築と外からやってくるものの関係を想像したとき、日本家屋の縁側が思い浮かんだ。日射からも風からも、そして周囲の環境からも、少し距離をとるイメージである。ここで言う「距離をとる」ということは決して対象から離れるものではない。むしろ光や風、その他多くの周囲をひきつけるためにある。

建築と外からやってくるものの関係を想像したとき、日本家屋の縁側が思い浮かんだ。日射からも風からも、そして周囲の環境からも、少し距離をとるイメージである。ここで言う「距離をとる」ということは決して対象から離れるものではない。むしろ光や風、その他多くの周囲をひきつけるためにある。

私はその知恵を展開していくことで、この住宅を考える。

関西大学 理工学研究科
ソーシャルデザイン専攻建築学分野 大学院

大西 慧

関西大学 理工学研究科
ソーシャルデザイン専攻建築学分野 大学院

徳永 真丈

距離に包まれる家
建築と外からやってくるものがどういう関係であるべきか問うこと、それが光と風を含む全ての周囲を建築でとり扱うことになるのではないかと考えた。

建築と外からやってくるものがどういう関係であるべきか問うこと、それが光と風を含む全ての周囲を建築でとり扱うことになるのではないかと考えた。

建築と外からやってくるものの関係を想像したとき、日本家屋の縁側が思い浮かんだ。日射からも風からも、そして周囲の環境からも、少し距離をとるイメージである。ここで言う「距離をとる」ということは決して対象から離れるものではない。むしろ光や風、その他多くの周囲をひきつけるためにある。

建築と外からやってくるものの関係を想像したとき、日本家屋の縁側が思い浮かんだ。日射からも風からも、そして周囲の環境からも、少し距離をとるイメージである。ここで言う「距離をとる」ということは決して対象から離れるものではない。むしろ光や風、その他多くの周囲をひきつけるためにある。

建築と外からやってくるものの関係を想像したとき、日本家屋の縁側が思い浮かんだ。日射からも風からも、そして周囲の環境からも、少し距離をとるイメージである。ここで言う「距離をとる」ということは決して対象から離れるものではない。むしろ光や風、その他多くの周囲をひきつけるためにある。

建築と外からやってくるものの関係を想像したとき、日本家屋の縁側が思い浮かんだ。日射からも風からも、そして周囲の環境からも、少し距離をとるイメージである。ここで言う「距離をとる」ということは決して対象から離れるものではない。むしろ光や風、その他多くの周囲をひきつけるためにある。

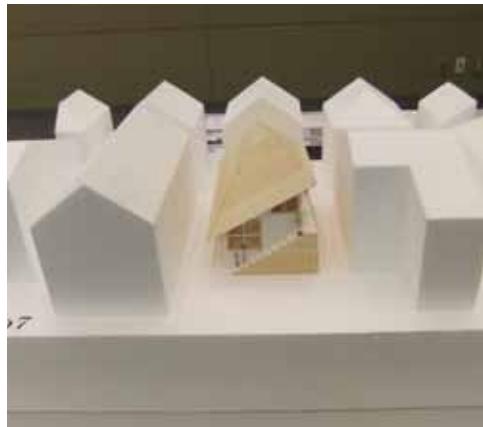
私はその知恵を展開していくことで、この住宅を考える。

神奈川大学 工学部
建築学科 大学院

宮坂 夏雄

佳作 (26点・順不同)

※作品のコンセプトは一部抜粋したものです。



「借景の家」

近畿大学 理工学部建築学科 4回生

阪口 達哉

「借景の家」
光と風は、建物を形作る根源的な要素である。軸組工法は、高温多湿な日本における風通しの問題から長い月日をかけて培われてきた。窓の大きな軸組工法によって、プライバートを確保するために庭のような干渉空間が必ず必要になる。しかし、住宅における隣棟間隔は狭くなる一方で、そのため隣家との間に生じるちっぽけなスキマでは、大きな窓を開けることは難しくなってきていた。庭のような屋外空間は、プライバートを確保するための干渉空間であるとともに、近所付き合いなどの大事なつながりの場でもあった。環境とは、まわりを取り巻く周囲の状態や世界のことである。狭くて庭まではつくれないけれど、窓開けたくなるような環境はつくれないだろうか。壁面後退した外壁をさらに少しだけ後退させた屋外空間の壁が家の周りを取り巻きながら上がっていく。

上昇し回遊する帯は、東側の隣家とは下の階で、西側の隣家とは上の階でという風に新たに断面的なつながりを生み、隣家を借景するようにして物を飾り付けていくことで干渉空間となる。借景とは、庭園外の風景を庭を彫成する背景として取り入れる。と言う意味の庭園用語である。庭もないのに、庭園用語のつく環境を纏った家。

借景し、環境に合わせ好きな物を飾り付け干渉空間とすることで大きな窓は開かれ、やさしい光と風が吹き込み、つながりの場となる。



「空き地の土管」

法政大学 デザイン工学研究科
建築学専攻 修士課程 1年 大学院

鈴木 智也・小土井 元規

小さい頃に遊んだ空き地。広い場所ではなかつたけれど、そこには光が溢れ、ときどき吹くそよ風が、走り回って疲れた体を優しく包みこんでくれた。そんな空き地の隅っこにあった土管の記憶。子どもがやっと入れる小さなその空間は、ぼんやりした光とさやかな風のある、僕たちの秘密基地だった。そこで、(完全な)外では行わない関係があった。影にすっぽり入ってる時間がたり、ある瞬間光の中に出たり。そこで、光と建築を使って、あるふたつの要素からできる世界をつくろうと思いました。普段の生活をより豊かにするために、光と影という境界を建築でつくってみよう、としました。影にもいろいろあります。遠くの影、近くの影、動くものの影、動かないものの影。建築とは人工的なものです。だからこそ、自世には建築でなければできない体験をつくることができるのではないか。



「踊る影の家」

京都工芸繊維大学大学院 工芸科学研究科
建築設計学専攻 大学院

長柄 芳紀・田中 裕大

踊る影の家
自分のいる場所ではない、どこからきた影を浴びることが気持ちいいのではないかと思います。たとえば、すごく遠くにある雲の影を浴びて「涼しいな」と思ったり、その雲が移動することでふっと光の中に戻ったりする。時間を使って、光と影の両方を体験するのが楽しいのではないかでしょうか。影にすっぽり入ってる時間がたり、ある瞬間光の中に出たり。そこで、光と建築を使って、あるふたつの要素からできる世界をつくろうと思いました。普段の生活をより豊かにするために、光と影という境界を建築でつくってみよう、としました。影にもいろいろあります。遠くの影、近くの影、動くものの影、動かないものの影。建築とは人工的なものです。だからこそ、自世には建築でなければできない体験をつくることができるのではないか。



「風の行き先、光の届く場所」

横浜国立大学大学院Y-GSA
都市イノベーション学府 1年生

武井 良祐

静かに佇む風景を切り取るガラスのキャンバスと動く風景が溢れる屋根上の広場があるような家の提案。都市の中では、様々な建物が短期間で多様な変化をしていく街並み、自然が豊かな地域では、波打つ川の流れや風に揺れる緑等を眺望として住む人々に心地の良い風景を生み出している。それに比べて、郊外住宅地の個性の無い街並みは眺望する対象が欠如していると感じる。その風景の欠如を環境問題と捉えることで住まいの原点である光と風とは何かを考えた。敷地には2つの山がある。それは細長い鉛筆のような高い山と平たい饅頭のような低い山である。2つの個性の異なる山は自然の地形のようない境を作り出す。高い山の南面をガラス壁にする。ガラス壁が南面に向くことで最大限の採光を確保する。そのことで、背の高いガラス壁は周囲の風景を映し出す1枚の風景になり、更に光を反射させることで低い山を明るく照らし出す。低い山の上では、夫婦がひなたぼっこをしたり、子供が遊んだり、犬が走り回るような動く風景が生まれ、街を明るく照らし出す広場になるとされる。高い山は敷地北側の道路に影を落す。そのことにより、道路を歩く人や他の住宅等に清涼感を与えることを期待できる。窓からの光の通り道と建物による影は道路の印象を変貌させる。高い山があることで風が生み出され、山から頭上を飛び越えて広場に吹き、山に当たって家と家の隙間に吹き、高い山と低い山の付け根にある風の通り道から道路に向かって細長い風が吹き抜けたりする。たくさんの風の通り道が生まれることで様々な風の音が作り出されて街を彩っていく。住宅の中だけではなく、周囲の環境にも様々な光と風の自然による心地良さを与えることで、住宅の存在が一つの風景へと変わり、眺望を獲得する郊外住宅地は、更に豊かになると考



「風光る」

京都造形芸術大学 通信教育部
建築デザインコース 4年生

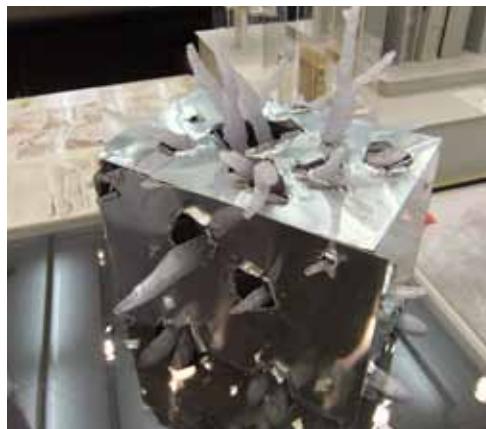
市川 恭

装束をつけ端居や 風光る
— 虚子風光る《季語・春》 — 大辞泉

日本語には美しい言葉がある。風光るという美しい日本語が表す情景が日本には、日常に溢れてる。光を浴びたカーテンが通り抜ける風を受けてたなびいている。それは、まるで風が光っているよう。カーテンで四方を固い、そのカーテンの濃度によって、光の透過度を調整し、プライバシーを保ちつつも、光で溢れた空間が得られる。カーテンを束ねると建物を構成している柱が隠れ、カーテンによって得られる浮遊感とは別の浮遊感を建物がもつようになる。カーテンは人間でいえば、洋服のように捉えることができる。季節によって、気分によって、カーテンを変えることで全体の雰囲気をがらっと変えることも出来る。空間の構成は中心に部屋を配置し、廊下を周囲にまわしている。部屋の扉や窓をあけることで、その部屋の前面の廊下を取り込み、部屋を大きく捉えることで廊下部分も部屋の一部として使用することができる。また、部屋の構成は将来の家族の生活スタイルの変化にも対応出来るように配置されている。廊下をとおして、風が通り、犬がかけまわり、家族の雰囲気が流れていく。風と光うまくつきあしながら、周囲のプライバシーも確保する。いつもの生活に美しい日本語が示す美しい一瞬を。そして、それが、いつでも感じられる日常を。

佳作 (26点・順不同)

※作品のコンセプトは一部抜粋したものです。



「house T」

千葉大学 工学部建築学科 3年生

竹中祐人・黒瀧晃平・吉原環

人を取り巻く環境はとても多様である。だから住宅はただ住まうことだけが求められているのではなく、その多様さを受け止めるべき環境でなければならないと感じた。現代の人々にとって、住宅があるべき状態を探っていく。樹木は環境との関係の中で自らを形づくっていく。その場を一生動かさない。光や風、雨や雪、時には周りの木々などに影響されて育っていく。その影響の結果が外形となり、樹木は周囲の生き物たちを受け入れ、環境の一部となる。そこで、樹木が環境の中で、光や風を求めて枝葉を伸ばし、自らを形づくる原理を利用して住宅をつくっていけないかと考えた。ただ、その原理は人の生活に直接現れるべきではない。樹木そのものを模倣するといったブリミティブな形ではなく、現代の住宅という、人を考慮した環境を求める必要があるはずだ。そこで、単純なハコを入れ子状に置き、その中に樹木の持つ生成原理を入れていく。入れ子というのは強い人工的空間であるとともに、自身と空間とでしか成り立っていない相対的な空間である。樹木にその強い人工物という環境を与えると、自然でも人工でも獲得しえない可能性を得られるのではないか。樹木の原理は与えた入れ子の中で広がり、均質な空間が揺らいでくる。日差しは木漏れ日のごとく降り注ぎ、そよ風があたりに吹き抜け、空間同士は依存はじめる。そこは強い人工的空間が崩れ始め、いろいろな気配が入り混ざり、不思議な関係性が生まれはじめる。ぼんやりしてきた空間の中で、樹木がその多様さを許容するように、住宅も様々なシーンを受け入れってくれる。自然的視点とも人工的視点とも言い切れぬ出発点が、現代の複雑に入り組んだ人々の環境を受け止める。この空間が人と人の互いの関係まで引き入れ、そこからまた新たな環境が生まれることを信じている。



「二つの殻をもつ家」

東京工業大学大学院
総合理工学研究科人間環境システム専攻 大学院

林 裕二

光と風の変化を生み出す外殻と内殻
私たちは光と風をどのようなときに感じるのだろうか。
それは、地下空間から地上へと降り立ったとき、窓を開け閉めしたとき、木陰に入ったとき…
これらのように、環境の変化によって光と風の状態が変化したとき私たち光と風の存在を感じるのだと考えた。
このイエは光と風を遮断する外殻による影と静寂の空間と、光と風を取り込む内殻による光と風に満ち溢れた空間の2つの空間で構成される。
人々は、この間の境界を生活する中で横断していくことで、あらゆる光と風によってつくられる空間を体験し、その存在を知覚する。



「中庭と寄り添う家」

宇都宮大学 工学研究科 大学院

中村 周

人は雨をしのぐために屋根を作り、風をしのぐために壁を作った。いつしか人は過剰に自分の身を外的要因から守るようになった。人は、過剰に防衛され、空気さえもが調整された部屋に閉じ籠もるようになった。

太陽の光と共に時間を過ごし、窓を開けて気持ちの良い風にあたる。そんな当たり前の事さえ忘れてしまった人が多い気がする。寒ければ暖房を付け、暑ければ冷房を付ける。1℃単位でコントロールされた空気は、僕たちの身体を常に一定の環境に保ってくれるが、それと同時に僕たちの人間らしさを少しずつ奪っていく。太陽の暖かさを忘れ、月の光を忘れ、風の囁きを忘れ、草花の香りを忘れ、いつしか僕たちは人の心も忘れてしまうのではないか。

この家は、内なる外である中庭が生活の中心になる家。大きな中庭と細長い廻廊で構成される。この中庭は開閉可能なガラスの屋根によって、太陽の恵みをいっぱいに受ける温室であったり、風が吹き抜けるテラスであったりする。冬は日向、夏は日陰、居心地の良い場所を探しながら、住人は環境と共鳴する。細くて長い廻廊にはたくさんの窓が開いていて、時間の訪れを光が教えてくれる。また、窓を開けて中庭と廻廊をつなげることで、夏は心地の良い風を、冬は暖かい空気を廻廊に取り込む事が出来る。

この家の住人は、四季の移ろいや天候や時間に合わせて居場所を選択し、本来人が持っている五感を上手に使いながら生活する。人が環境を変えるのではなく、環境に合わせて人が変わっていく時代が訪れている。



「カベゴシ生活-ふれられる光と風-」

三重大学大学院 工学研究科博士前期課程建築学専攻 大学院
三重大学工学部建築学科4年

三谷 裕樹・馬込 慶太

住宅とは個室の連続である。だが個室だけで生活は足りない。新興住宅地などにみられる、間口があまりとれない狭小敷地の建物が連続する建売住宅計画地。このような立地条件において、平面計画のバリエーションには限りがあり、必然的に開口の位置は隣り同士で向かい合ってしまい、そのため窓はカーテンやブラインドなどで閉ざされてしまいかになる。

隣の家の視線交錯を避けるため東西方向の開口は最小限に抑え、それでも部屋の中に十分に採光、通風を行えるようにする必要だ。また限られた面積の中で、生活に必要な収納も確保しなければならない。

のために部屋と部屋の間に光と風が通る「外壁」としての機能と個々の生活を支える家具としての「内壁」の機能を併せ持つような柔軟性のある「カベ」を提案し、それを中心に空間を構成した。

この「カベ」は光と風を通す窓・戸などのさまざまなバリエーションの開口と一定のモジュールの棚板とで構成されている。光は直線的な、風は流動的な方向性をもち開口の形状に変化をもたらす。

棚板は住まう人物の性格や成長などの生活から生まれる要素によって変化していく。各部屋に光と風は触れられる距離にあり、部屋からもれる光と風に気配を感じることができる。

部屋と部屋の間には中間的な役割を果たすスペースが生まれることで家族同士の関係は少し変わる。

趣味で集めたコレクション。学校の教科書や参考書。お気に入りのお皿にコップいろいろなモノが棚から見える。

“カベ”越しの生活は“カベ”的使い方次第で、個室自体は狭くとも共有する感覚を広げ、光と風を家族で感じながら生活していく。



「螺旋と奥行きの家」

近畿大学 システム工学研究科システム工学専攻
大学院

渡辺 正悟・中村 遼太

そもそも光や風と私たちとの間に距離は無かつたはずである。本計画は螺旋によって生じる奥行きによって、自然からむしろ距離をとる計画である。住空間を螺旋状にすることによって螺旋の中心部に位置する個室は外的要因の影響をうけにくい。外周の空間は壁一枚隔てて外気に触れることができるが、中心部の空間は壁に囲まれ、螺旋が生んだ奥行きによって外気からは離れた距離にいる。螺旋の中心部には多重の壁面に覆われた空間ができる。中心部になるほど空間を覆う外殻は多くなり、狭く、個に適した空間となる。逆に螺旋の外周側に位置する空間は外殻の数は少なく、広い室内で公共性に富む。螺旋は内側に向かって無限にフランタルな图形を描き続け、一つのウォリュームの形を保ったまま奥行きを伸ばして行くことができるという特徴をもっている。建築内部で得られる環境は現在の単一的なものではなくなり、この奥行きによってもっとドラマチックに配置することができるだろう。現在私たちはなんとなく環境に対する傍観者として生活しているコマーシャルや広告から発せられる上等の宣伝文句は、私たちの耳をマヒさせ、環境住宅の真価はかすんでしまう時代となった。広告情報によって多くの人々は環境に対する見識を深めるどころか、距離感を失い、それらの存在を重視しなくなってしまったように思える。しかし、私達が求める住宅の在り方は原始の昔から本質的に変化しうることは無い。空間哲学、構造技術は時代によって変わり続けるが、光や風の存在が住む人に与える影響は古来より不变である。『風』といふ言葉は風景、風俗、風習、など、時代とともに変化しながらも、そこに在り続けるものの表現として使われることも多い。私達は光や風が螺旋状の空間の中をグラデーションを描きながら進んでいくその点景を想像したときに、先人たちが憧れた最もシンプルな自然の姿が在るのではと感じた。

201 | residential design competition [住宅設計コンペ]

佳作 (26点・順不同)

※作品のコンセプトは一部抜粋したものです。



「風車の家」

芝浦工業大学 工学部建築学科 大学院

寺田 彩瑛子

一般の住宅では、光と風を、窓から取り入れます。しかしながら、隣家と接した面では、家と家の間を流れる隙間風を、家の中に取り入れることは難しく、また、視線を気にして、大きな窓をつくるない場合が多く見られます。結果、道路と接した面に限定して、光と風を取り入れようとしているのが現状です。そこで、まちの光と風を、家全体で呼び込む「風車の家」を提案します。「風車の家」では、四方全てが、大きな扉で囲われています。この扉は、外の風景や隣家の壁面を直接見るためのものではありません。大きな扉は、敷地境界線までしか開けませんが、そのかわりに、隙間風と、大きな扉の壁面をつたってく柔らかな光を、内部へと呼び込みます。また、中央の階段室のトップライトを介して、部屋の内側からも光を取り入れることが可能となり、それぞれの部屋は、外側・内側の両方から、内部へと光が漫透していきます。

光と風——この両者と、今までとは少し異なる接し方をする「風車の家」が、光と風と、私たち人間との新たな関係を考えるきっかけとなることに期待します。



「おおきな煙突」

信州大学 工学系研究科・社会開発工学専攻 大学院
信州大学・工学部・建築学科・4年

松寄 貴紀・立松 裕規

この家には煙突がある。おおきなおおきな煙突。おおきな煙突は光を纏い、風を纏い、そして人を纏う。現代の住宅の多くは社会や都市から目を逸らし、内向きな生活を嗜好している。外部環境を顧みず、良好な住環境だけを追い求めることで、人間は多くのものをなしにしてきた。煙突もそうである。自らの家のエネルギーの消費により排気をもたらす。この行為は都市を顧みず、現代の建築のみならず、現代人の性質を如実にあらわしているように思う。煙突をもう少し、都市的なものに位置づけたとき、その振る舞いは変化するのではないかだろうか。住宅に古くからある普遍的な機能、煙突。この煙突をただ大きくしてみると、煙突を都市へと開くのである。おおきくなった煙突は、家の中だけで完結していた対流機能をまちへと拡大し、光と風を介することで、家に新たなるまいが与えられる。

<光> おおきくなった煙突は光を纏い始める。おおきくなることで、かつては閉ざしていた光を内部に導く受け皿となる。広げられた煙突は、半透明な素材への変化を伴うことで、昼間、やわらかく光を巻き込んだり、反射させたりする、暖かな空気の拠り所となる。夜には、内部の灯りでまちをやさしく照らす。

<風> おおきくなった煙突は風を纏い始める。おおきくなることで、その効果を増大させる煙突は、まちの風と家の風、そのおいや温度を混ぜ合わせ、家にまちの空気を受け容れる。自分の家のご飯の匂いも、隣りの家の洗濯物の香りも、どれも等価に、住宅内部を抜けていく、住宅が都市を内包し、都市が住宅に介入するのである。

<人> おおきくなった煙突は人を纏い始める。光と影がもたらす煙突の空間に寄り添うように、家族と周辺の住民の生活が営まれる、GL+1000 mmの位置から始まる煙突は、都市の隙間となっている領域に構を建てるのではなく、腰から上に柔らかく領域をもたらすことで、周辺住民に対しても開かれた、小さなコミュニティスペースが生じる。光と風の力を借りて、まちと家を少し近づけること。境界の定義を揺るがすこと。おおきな煙突。



「窓壁により境界を超える」

北九州市立大学大学院
環境工学専攻建築デザインコース 1年生

丸山 翔

現在の住宅において、光環境や通風などは設計する際に考慮されてはいるが、住人とそれらの環境とが密接な関わり合いを持つ住宅は少ないのではないか。今回の設計ではこの住宅に住む人の生活と、光や風などの環境とが相互に関わり合うことを目指してきた。煙突もそうである。自らの家のエネルギーの消費により排気をもたらす。この行為は都市を顧みず、現代の建築のみならず、現代人の性質を如実にあらわしているように思う。煙突をもう少し、都市的なものに位置づけたとき、その振る舞いは変化するのではないかだろうか。住宅に古くからある普遍的な機能、煙突。この煙突をただ大きくしてみると、煙突を都市へと開くのである。おおきくなった煙突は、家の中だけで完結していた対流機能をまちへと拡大し、光と風を介することで、家に新たなるまいが与えられる。

窓壁の中には、開いてる窓があれば閉まっている窓もある。洗濯物を乾かすために大きく開けられた窓があれば、換気のために小さく開けられた窓もある。人が移動するために開けられる窓があれば、モノを収納するために閉められる窓もある。また、窓壁同士がレイヤー状に重なることで様々な透明度を持つガラスが複雑に絡まり、新しい光環境が生まれる。

住人がここで過ごす「生活」が持つある種の曖昧さ、不確定さがこの窓の存在意義を生み、さらに住人と環境との新たな関わりが生まれることになる。大きさも透明度も異なる引き違い窓が集合する「窓壁」が存在することにより、内部と外部、あるいは内部と内部の関係に複雑でありながら柔軟で自由な「選択性」を与えることになる。その結果、これらの境界に物理的ではなく意識的な「距離」をもたらす。この意識的な「距離」を生活中で感じることで、私たちは光や風などの「環境」と新たな関わり方ができるのではないだろうか。

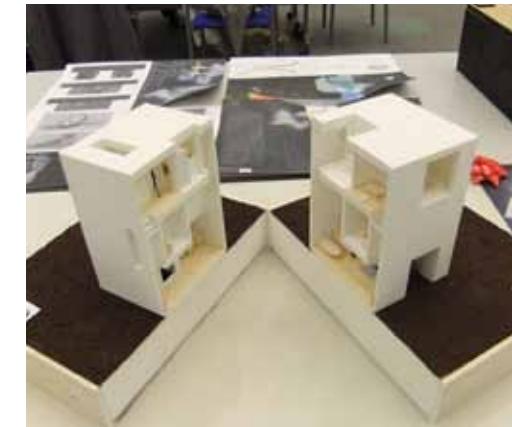


「風に浮かぶ家」

明治大学 理工学研究科建築学専攻 2年生

平川 勇登

風に浮かぶ家
ボリュームを少し浮かしてみると、するとそこには道が生まれる。風の道や光の道、緑の道や通り道、視線の通り道…それらの道が交わることで関係性が生まれ、風を光を緑を感じられる空間になっていく。
浮かすことでも生まれる空間の広がり。
緩やかに分けられる領域。
大きな吹き抜けに螺旋階段、浮かぶボリュームやそれを支える垂直の木柱が上下への意識を強めていく。
浮かす操作は同時に、表面積を増やすこととなり、生活をする中で多くの自然と関わることとなる。



「ソフトカベノイエ」

東京理科大学大学院
理工学研究科・建築学専攻 大学院

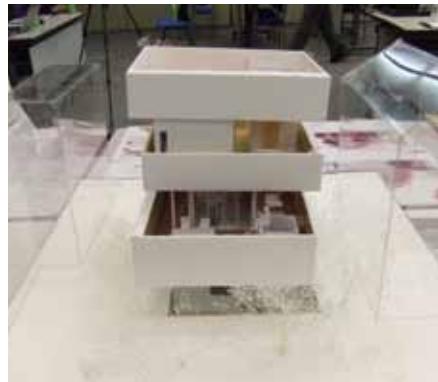
本杉 一磨

かつて日本の住宅は光と風に満ちた住宅であったのではないだろうか。僕は「光と風」という言葉から縁側のような空間を思い浮かべる。縁側では家族がくつろいだり、居場所となる気持ちのいい空間であった。しかし、日本家屋の特徴ともいえた縁側も近代化が進むにつれてその数は減少し、外部との接点はベランダとしてかたちを変え、生活とかけ離れたものになった。現代の住宅は、外部環境からの影響を出来るだけ少なくするために閉じるようにつくられた。結果として住宅は地域とのつながりを失っただけでなく、家族同士のつながりも希薄なものになってしまった。そこでこの住宅では限られた内部空間をどう仕切るかということに主眼がおかれた。内壁はより複雑になり、外壁よりも内壁がどう扱われるかが問題になっていた。ここに僕は、現代の住宅における最大の疑問を感じる。プリミティブな住処としての洞窟の次に人間が初めて建てた家は、屋根と外壁によって構成されていたはずである。住宅が家族を分断してしまった現在、初心に立ち戻って考えてみる必要があるのではないだろうか。だからといって、外にも内にもプライバシーのない日本家屋を現代の生活にそのまま取り込むのは不適応であろう。本計画では日本家屋の特徴であった「生活の領域内に外部環境を取り入れる」ということと、「壁を用いずに空間を仕切る」という2点をキーワードに現代における環境住宅を再構築することを試みる。

外壁を内側に折り曲げる。凹んだ外壁は外部環境を生活の領域に取り入れるだけではなく、人々の居場所をつくり出す。この単純な操作によって、一室空間でありながら、それぞれのスペースは互いにプライバシーを保つように構成することができる。それぞれのスペースにはそれぞれの庭があり、部屋と一緒に使うことで日常的に光と風を感じる生活を送ることができる。住宅内外の境界である外壁を操作することで「都市と住宅の関係」と「住宅内部における家族同士の関係」を同時に考えてみたいと思った。

佳作 (26点・順不同)

※作品のコンセプトは一部抜粋したものです。



「Dancing room」

京都工芸繊維大学大学院
建築設計学専攻 大学院

曾根 拓也・檜垣 政弘

内部のようなふるまいをする外部空間が小さく縦に積まれた住宅である。それは様々な外部環境に影響されながら、踊るようにプレートがずれて、それに伴って内部空間もずれることで様々な条件の外部空間が出来る。その外部空間はお皿のような形状により内部のようなふるまいをする。住宅にとって「光と風」について考えるときに、半戸外空間はかかせないものとして設計されてきた。古来、日本建築では縁側のような空間や軒下の空間を作ることで人は内と外との距離をとってきた。私たちは今回、垂直方向に展開し、内部のような外部を提案する。半地下にすることで周辺とのレベル差をかえ、周囲を囲う壁の高さや厚みを変化させ、視線をコントロールする。また、方位によってずれる大きさをかえることで、採光をコントロールする。プレートの感覚をあけ、風の通り道をつくる。ただの外ではなく、室内的ふるまいをもった外部空間を縦に展開することで、新しい住宅の在り方を模索する。きわめて内部に近い外部をもった住宅は、外に対して閉じるわけでもなく、緩やかに外ともつながる。必要最低限の内部空間で外との関係を積極的に考えた時、そこには新たな住宅の環境が現れるだろう。



「エントツに住む」

日本大学大学院
生産工学専攻建築工学研究科 1年生

小野寺 真希・土屋 舞子

エントツは、ひとつの「環境」だ。通常、住宅における煙突は、排気を目的として用いられる単に機能の一部である。しかし、煙突は決してただの排気システムではない。煙突はその細長い体内に、流れる空気とそして先端から差し込む光を有するひとつの「環境」である。煙突内部の空気は、煙突のその高低差から内部の空気に温度差などが生じ、自然と空気の対流が促進される効果をもつ。また、煙突に内包される空気は煙突の先端をかすめる風によって外に誘引されるところから、煙突内部の空気は常に自然な流れを持っており、これらの効果は実際に近年のエコロジー建築にも採り入れられている例もある。私たちはこの煙突を、単に住宅の機能の一部として、またエコロジーの為の機能として活用するのではなく、煙突を光と風を有するひとつの「環境」として捉えることでその「環境」の中に住むことを提案する。住宅街の中に現れたエントツという環境は、その体内に持つ独自の風の流れと、小さな先端から引き込まれる極めて繊細な光の重なりによって、新しい魅力的な住空間を体験できるだろう。



「風のさきにある陽だまりのはしょ」

名古屋工業大学 社会工学専攻 大学院

香村 翼

自然の中に住もう豊かさ
古来、人は風の導くままに歩き、移動し、その先で見つけた日向や日陰、木漏れ日といった様々な光環境のもとに自分の居場所を定めてきた。自然の流れに身を任せ、自分に適した居場所を見つけ出しそこで過ごす。そこには、限られた空間しかできない現代の住宅にはない豊かさがあるようを感じる。内部と外部を明確に区別してしまう住宅が獲得できなかつた原始的な生活の豊かさを、自然の中で暮らしているような豊かさを住宅の中に見出すことはできないだろうか。普段は床下や屋根裏で処理してしまう熱や空気の流れを住空間に取り込むことで、住宅を自然環境へと近づけることを試みる。この住宅は主にトンネルと大きなサンルームで構成されている。トンネルが風の通り道であり、サンルームが空気を動かす動力源となっている機械のような住宅である。サンルームで暖められた空気が上へとあがっていくことで北に面したトンネルの入り口から空気を吸い込む仕組みになっており、トンネル内を下から上まで風が通り抜ける。また、サンルームを構成している屋根はその下に様々な光環境を生み出す装置にもなっている。人は風に誘われるよう、風と共にトンネルを通り抜け、その先に垣間見える光の空間に自分の居場所を見出す。その光の下で食べたり休んだり本を読んだり、その行為に適した環境のもとで行為が行われる。ここには先に述べたような原始的な生活の豊かさ、自然の中で暮らしているような豊かさを感じることのできる環境が成立しているのではないだろうか。



「風が暮らす家」

東洋大学院 福祉社会デザイン学科 大学院

吉田 尚平

風を感じなくなつてどれくらい経つんだろうか。
子どもの頃にみんなでよく遊んだ秘密基地は、ボロボロで、隙間だらけで、基地と呼べるほど守られた存在ではなかったけれど、とても豊かな体験だった事をハッキリ覚えている。自然の中にひっそりと、今にも風に吹かれて壊されてしまいそうな、小さな小さな生活的スペースがそこにはあった。そとではビュウビュウと吹く風や、容赦なく降り注ぐ太陽、朝方や夕方の肌寒さなど、様々な自然と常に隣り合はせだったが、自然から生活を守るためにつくられた住宅に暮らす私にとって、新鮮で、刺激的だった。現代の住宅は様々な自然を排除すべき対象とみなし、人間の生活領域を中心と考え、その中に都合の良い自然をどれだけ取り入れるか、という問題に執着している。そのような自然と人間の関係をつくる建築にラディカルな生活の提案はできない。むしろ、ありのままの自然の中の人間がどのように住みついていくかを考えいくべきではないだろうか。何もかもを提案してしまう「至れり尽くせり」な機能主義的価値観ではなく、人間が元より持つてはいる「生活する強さ」をつくり出すような住宅を提案する。「風」もまた、排除すべき対象として捉えられてきた。人が中心に暮らす住宅ではなく、風が中心になった住宅を考える。この住宅はそのほとんどが外部であり、中心には常に風の流れを生む大きな二枚の湾曲した壁がある。そこにとりつくようにして、ベッドルームやキッチンなどわずかな内部空間が存在する。そこでは風と共に隣り合わせの生活が営まる。春には花の香りを届け、夏には雨を叩き付け、秋には落ち葉を運び、冬にはビュウビュウと声をあげる風が暮らすこの家で、人はひっそりと、そして力強く暮らしていく。



「3°の風穴のある住宅」

京都工芸繊維大学
工芸科学部造形工学課程 4年生

伊藤 祐紀

「光と風。」それは住宅のみならず、全ての建築を考える上で必ず考慮しなければいけない条件の一つであり、僕らが生活する環境でもある。毎年8万近くの住宅が新しく建設される状況の中、個人が新しい秩序を表明しなくても具体的で単純な方法によって最良の建築が作られるのではないかと考えた。形やプロポーションなどの構成によつても新しい建築は十分創造可能なはずである。この住宅は、単純な家型のヴォリュームの3層構成で、同じプロポーションの窓が4つ開き、建物が敷地に対して3°振れているだけである。家型の空間に中空の空間を立体に入れ子状に配置させることで、生活の空間(中空の空間)とその他の機能の空間(周りの空間)という単純な空間構成となる。中空の空間と周りの空間の隙間に窓が拡張したような空間を設ける事で、空気を留めて暖かい環境を必要とする冬場と風を通し気持ちの良い環境を必要とする夏場の関係において、マスとヴォイドの関係が中空の空間と周りの空間で反転する空間図式となる。窓空間は季節によって、その在り方を変化させるだけでなく、この住宅の光、風、空気を取り込む重要な場所でもある。全ての部屋に均等に光や風を享受させるのではなく、対比によって空間の質を変化させる。一見、単純な家型のヴォリュームの住宅であるが、ほんの少しだけ形やプロポーションの構成を変化させることで、光と風を感じる事ができる豊かな住宅へと生まれ変わると考えた。



「蚊帳の家」

金沢工業大学
環境・建築学部・建築学科 4年生

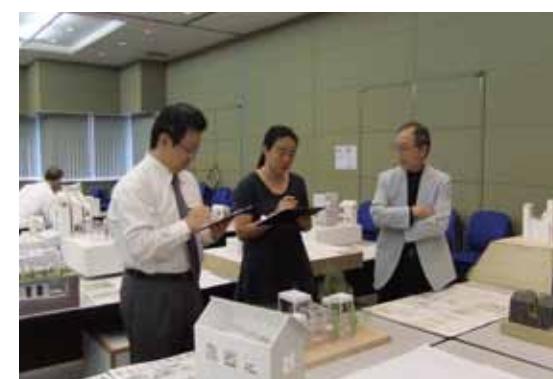
中村 有利・横山 祐樹

住まう器とは本来、住む人が修繕を重ねることによって、生き物のように膨らんでいくものである。季節が変われば修繕を重ね快適な環境をつくりだし、自然や人の恩恵を受けるために距離感を調整し、住まうことを営んでいく。そんな住むことの本質から、人間の巣のような家を考える。巣とは自然の恩恵を受ける皮膚の様な外皮を持っており、内部の環境を調整する重要な役割を担っている。ローディ「初源の小屋」では、自然の恩恵を少し工夫するだけで人間の住まいになることを示し、快適性を追求するあまり設備機器を重装備した現代の住宅ではなく、自然界の原理や伝統的な民家が持つ設備に頼ることなく快適に過ごせる工夫や、生物の環境へ対応する仕組みを取り入れることが我々人の住まいの本質だといえる。また、住まうための巣として、生物が巣の手入れをするように、周囲の環境を自ら作り替えていく修繕の在り方もある。四季の流れで気候が変化すると、家自体の外皮を衣替えすることで内部環境を整していく。家の衣替えは、家族全員で行う大晦日の大掃除のような団らんのイベントであり、家族同士の接点を多くしていく。また、外皮を取り替えることで周辺の風景の見え方も流れていく。本計画では、家のものを蚊帳と外皮の皮膚で包み、住む本質や人間の営みを介して、光と風の恩恵を感じ共有するものである。本来、虫や塵を阻み光と風を取り入れる蚊帳が領域を分節し、外皮を季節や気候の変化によって取り替えていく。光と風は心地良いものであるが、時に住まうこと自体に障害をもたらす厄介な存在でもある。そんな2つの表情に対応するために修繕を営む。また、その表情の変化を縁側を介して凜として受け止める。光と風を感じ拒絶することで住まい方や外皮を変化させ、生きること・住むこと・修繕することが一体となることが「住まう」姿なのではないか。

201 | residential design
competition
[住宅設計コンペ]

二次審査の様子

平成23年 8月27日(土)
会場:トステム東京ショールーム



jury

time schedule

エントリー締切 平成23年 5月3日(火)PM5:00 JACSホームページのみ URL : <http://www.jacs.cc/>

1次応募締切 平成23年 5月9日(月)必着

郵送先 : JACS新潟事務局(株式会社ステーツ内) 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 Tel.025-383-3003 Fax.025-383-3733
データ送信先 : kazama@states.co.jp (pdf、もしくは、jpeg:200dpi以上し、フォルダにまとめ、zip・LZH圧縮し送信)

1次審査 平成23年 5月14日(土)

会場:トステム東京ショールーム(予定) 審査員の協議により選定いたします。【非公開】

1次審査発表 平成23年 5月15日(日)

審査会場展示。結果は1次審査通過者にメールで通知するとともに、ホームページ上にて発表。
※1次審査通過は30点を予定しております。1次審査通過者は2次審査の準備をお願いいたします。

2次応募締切 平成23年 8月22日(月)必着

郵送先 : JACS東京事務局 〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3(JAM内) Tel.03-3685-8484 Fax.03-3685-2514

2次審査 平成23年 8月27日(土)

会場:トステム東京ショールーム(予定) 審査員の協議により各賞受賞者を決定。【非公開】

2次審査発表 平成23年 8月28日(日)

審査会場展示。結果は各受賞者にメールで通知するとともに、ホームページ上にて発表。

prize

下記賞品を受賞された方に差し上げます。

●最優秀賞(1点) 賞金100万円

最優秀作品を始め各入賞作品のうち、
設計者の希望するものについては、
建築・販売を実現するため、JACSが全面的に
バックアップ致します。

●優秀賞(2点) 賞金10万円

●佳作(27点) 賞金1万円 (ただし模型提出者に限る)

(1次審査を通過し、2次審査にエントリーした作品全てを入選とします。)

注意事項

- ・他者の著作権に触れる画像、文書などの使用は認めません。・雑誌、書籍、ホームページからの無断借用も認めません。
- ・2次審査提出模型のみ、ご希望される方には返却を行います。その他の提出品は一切返却いたしません、必要な場合はあらかじめ各自で複写しておいてください。
- ・本コンペの応募作品の著作権は応募者に帰属しますが、入賞作品及び入選作品の発表に関する権利は主催者が保有します。
- ・入賞後の応募者による応募内容の変更は認めません。・入選入賞後に、著作権侵害などの疑義が発覚した場合、これを取り消します。
- ・応募作品にて著作権侵害などが発覚した場合、全ての責任は応募者が負うものとなります。
- ・審査の結果については、何人も異議の申し立てをすることは出来ません。

※応募に際して主催者側が取得した個人情報並びに提出物は、当コンペのみに使用されるものであり、その目的の範囲を超えて個人情報を利用する場合、事前に応募者にその目的を通知し、承諾を受けて行うものとする。



Kensuke Yoshida
吉田 研介(神奈川)
吉田研介建築設計室



Masahiro Toyoda
豊田 正弘(東京)
豊田編集室



Akiko Miya
宮 晶子(神奈川)
STUDIO 2A